

《論 文》

ドイツの国語教科書に描かれた家事行動の変遷

塘 利 枝 子

[問題と目的]

1. 家事における性役割

日本では「家庭動向調査」において、1993年から5年ごとに夫婦の家事分担と家事遂行についての調査が行われており、7種類の家事(「ゴミ出し」、「日常の買い物」、「部屋の掃除」、「風呂洗い」、「洗濯」、「炊事」、および「食後の片付け」)について、夫と妻の家事遂行の頻度をたずねている。その結果、2008年に比べて2018年になると週1～2回以上家事を遂行した夫の割合は微増しているものの、2018年段階であっても夫と妻が遂行する家事の総量を100としたとき、それぞれが分担する割合について、妻の分担する割合が圧倒的に高く80%を超える(国立社会保障・人口問題研究所、2020)。国際比較調査(GESIS - Leibniz-Institute for the Social Sciences, 2012¹⁾)においても、日本の有配偶男性の家事時間は、「まったくしない」と答えた人が18.9%と約2割おり、1週間の平均家事時間は4.34時間(SD = 6.11)となっていた。それに対して有配偶女性の家事時間は、18.55時間(SD = 15.34)であった。

一方、本研究で取り上げたドイツでは、有配偶男性で「まったくしない」と答えた人は、旧西ドイツ地域で5.7%、旧東ドイツ地域で4.2%となっていた。男性が行う1週間の平均家事時間も旧西ドイツ地域で7.78時間(SD = 7.01)、旧東ドイツ地域で9時間(SD = 9.78)であった。女性では旧西ドイツ地域で15.27時間(SD = 12.29)、旧東ドイツ地域で13.61時間(SD = 9.79)となっており、依然として女性の家事時間の方が男性より長い、日本と比べると男女差は小さい(GESIS - Leibniz-Institute for the Social Sciences, 2012)。本研究では、日本より家事分担が進んでいるドイツに焦点をあてて、ドイツの小学校国語教科書に描かれた親の家事行動の分担とその内容の変化について分析する。

家事とは、「個別的家庭生活の場で、家族員の広い生命活動をも含めた労働力の再生産のために行われる、家事・育児・家政管理の労働である」(伊藤、1981: 3)と定義されている。また社会的労働過程での労働に対する私的労働であり、かつ個人的消費の過程での労働であるという性格を持っている(伊藤、1981: 3)。天野(1978: 166)は、家事労働を①生活手段をととのえる労働、②家族内人間を対象とする労働、③家政管理労働に分類している。本研究では前述の「家庭動向調査」の家事の内容をも踏まえながら、実際にドイツの教科書に記載された家事の内容をもとに分類した。

2. 家庭・社会内で伝達される家事行動

伊藤(1981)が述べているように、家事は個別的家庭生活の場で行われるものだが、家事行動

はどのように子どもに継承されるのだろうか。結婚後の家事行動に大きな影響を与えるものの一つとして、子どもの頃の家庭内での家事分担があげられる。日本・アメリカ・韓国の0～15歳までの子どもを持つ父親または母親を対象にした調査によると、日本の子どもが行っている家事分担の割合はアメリカに比べて低く、特に「家事を何もしない」との回答がアメリカと韓国では5%未満しかみられないのに対して、日本では15.6%にもなる(総務庁青少年対策本部, 1995: 28)。「家族のために食事を作る」ことが15歳のときに1人でできると思うかを6か国の親に聞いたところ、日本では54.9%であり、タイ・アメリカ・フランス・スウェーデンよりも低かった(国立女性教育会館, 2006: 95)。

また日本国内において家事行動の性差もみられた。男子の方が女子よりお手伝いの頻度が低く、家事頻度が低い群はジェンダー意識が強いことが指摘されている。そして特に「家族のための家事」頻度の高い子どもは、伝統的なジェンダー意識をもつ割合が低かったとも述べられている(表, 2005)。子どもの頃のお手伝い経験は、高校卒業後の家事頻度とも関係があり、子どもの頃にお手伝いをよくした者は、高校卒業後も家事をよくしていた(岩崎, 2016)。このように子どもの頃の家事分担は長期的な家事行動にも影響を与えると推測される。

さらに不破・筒井(2010)は、家事分担と不公平感に関する国際比較データから、妻の家事分担比率が高い国や性別役割分業意識が強い国では、実際に妻の家事負担が大きかったとしても大きな不公平感をもちにくと指摘している。妻が長時間就業していたり、高学歴であったりしても、社会全体の伝統的な価値観が個人の不公平感を抑えていると言えるだろう。すなわち単に各家庭の個人的な経験や性別役割分業観のみならず、社会全体で共有されている性別役割分業観が個人の家事分担に対する不公平感にも影響を与えており、その後、次世代の性別役割分業観にも様々な影響を与えていくと考えられる。

3. 小学校教科書に描かれた家事行動

各家庭の親や地域社会で共有された家事行動における性別役割分業観を子どもが学ぶことが、いわば非公式の学習であるとすれば、学校内で学ぶ性別役割分業観は公式の学習であると言える。その中でも教科書に描かれた親の家事行動は、社会が子どもたちに向けた公式のメッセージであると考えられる。教科書は、各国・社会を担う次世代の健全な発達と学習の向上を目指し、教育関係者により作成される公文書であり、各時代の大人の期待が反映されていると考えられる(塘編, 2005)。

学校の教科の中でも、家事そのものについての仕方や価値観を教えるものとして家庭科があげられる。『小学校学習指導要領(平成29年告示)』の「第2章 各教科 第8節 家庭」の中には、「家庭には、家庭生活を支える仕事があり、互いに協力し分担する必要があることや生活時間の有効な使い方について理解すること」と書かれている。『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編』においても、「家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること」が目標として掲げられている。

本研究で対象としているドイツでも州によって異なるが、日本の「家庭科」に類する科目は

存在する。そしてその中でも科目の目的として「様々な家事状況の事例において、家事の課題を克服する手法を理解し、判断する。その際、パートナーシップに基づいた行動が、調和のある共生のための基本条件であること、また職業、家事、家庭生活をどのように調和させることができるかを学ぶ」ことがあげられている(国立教育研究所, 2005: 65)。すなわちドイツにおいても家庭科の教科書に描かれた家事行動は、「家族の協力」について次世代に対する各州政府の期待や価値観を意図的・明示的に示しているものであると言える。

一方で、国語の教科書の第一目的は子どもたちに次世代の理想的な価値観を教えることではなく、文字の読み書きや話す・聞く力をつけることである。したがって家庭科の教科書のように理想的には望ましいが実際の現実社会の人々の行動とは異なる男女共生の先進的な価値観を教えるというよりは、読み書きに必要な学習内容を掲載することがより重視される。そのため、家庭科の教科書に比べて、それぞれの時代における社会の大人により受け入れやすいと思われる価値観が、国語の教科書の作品内には反映されやすいと言えるだろう。本研究では家庭科のように国家が示す意図的・明示的な期待や理想的な価値観が描かれているものではなく、教科書に映し出された各社会の一般的な価値観に焦点をあてて、ドイツの国語教科書に描かれた親の家事行動を分析した。

各国の国語教科書に反映された家事の一つである育児に焦点をあててみると、ドイツでは前述の国際比較調査にみられた実際の家事参加度と同様、2000年出版の教科書に描かれたドイツの父親は、日本の父親よりも家事を多く行っていた(Tomo & Tung, 1999)。また日本の父親は他の中国・台湾・韓国などの東アジア諸国・地域と比べても育児参加度が低く、同時に伝統的な性別役割分業観に基づいた母親の育児行動がより多く描かれていた(塘, 2003)。さらに日本・中国・台湾・韓国の4か国・地域の1960年と2000年に出版された小学校国語教科書に描かれた親の育児行動を分析した結果、特に台湾の父親の育児行動が変化をしており、2000年出版の教科書にはよりこまごまと子どもの世話をやく父親が登場していた(塘編, 2005)。

4. 親の家事行動を左右する要因

教科書に描かれた親の育児行動においては、西洋を代表したドイツと東洋を代表した日本の間だけではなく、東アジア諸国・地域においても育児行動における違いがみられ、同じ国の中であったとしても、年代によって父母の育児行動は異なる様相を示していた。このような違いや変化をもたらす要因として、単に西洋と東洋の違いといった「文化の二分法論」で考えるよりは、社会システムや産業構造による違いや変化を考慮に入れる必要性が指摘されている(Tomo & Tung, 1999)。また社会・経済の変動や女性の就業率の変化が家族のあり方や育児行動にも影響を与えることが述べられている(塘, 2008)。

それらに加えて、社会の政治体制も親の育児行動に影響を与えられと考えられる。例えば中国のような社会主義体制の国では、女性に対して家庭外労働を国家として奨励しており、教科書に描かれた親の育児行動においても、父親が家庭内で積極的に子どもに関わる姿がみられた(塘編, 2005)。本研究ではドイツにおける親の家事行動に焦点をあてたが、ドイツは1949年から1990年まで東西に分断されており、政治体制も異なっていた。東ドイツでは社会主義国とし

て、女性の家庭外労働が政府によって奨励され、女性が就業している間に子どもを預かる保育施設も整備された。その背景として、労働力の恒久的な不足のために女性を緊急に雇用する必要がある、女性の雇用が促進されたという経緯がある(Koch, & Knöbel, 1988 : 18)。一方、西ドイツでは、特に有子家庭への経済支援に焦点をあてた社会政策と家族政策により男性が家族の中で主な稼ぎ手となった結果、妻の「主婦の座」が促進された(Münch, 1990 : 172ff)。西ドイツの女性の家庭外労働に対する考え方が変化をしたのは、西ドイツをも含めた他の国々で起こった女性の社会進出に対する考え方の変化が影響をしていると考えられる。このような東西ドイツの歴史的な社会的背景の違いが存在するがゆえに、今まで東アジアで検討されてきた政治体制の違いと女性の社会進出における考え方の変化を、一つの国家の中で検討するのにドイツは適した国だと考えられる。

以上の理由から本研究では、ドイツの1960～2010年までに出版された国語教科書に描かれた作品を材料にして、各作品に登場する父親と母親の家事の内容における年代間の比較を行った。なお、本研究でのドイツの「国語」教科書は、「読み物」(Fibel, Lesebuch)教材の教科書を対象にしており、それらの教科書に掲載された物語文と説明文の「作品」を対象にした。但し、詩や、各作品の後に書かれている読者に対する「設問」や文法的な「説明」は対象外とした。分析対象作品に関する選択基準の詳細については後述する表2に記した。そして教科書に描かれた父母の家事における性別役割分業観についての変化を分析し、家事分担に関する実際の国際比較調査、女性の就業率の変化や政治体制の違いから考察することを目的とする。

[方 法]

1. 分析対象となった教科書の選定

本研究で対象となった教科書は、1960～2010年にドイツで出版され、小学校²⁾(基礎学校: Grundschule) 1～3年生(約6～9歳)でドイツ語を母語とする児童用の国語(Deutsche)教科書である。基礎学校段階の子どもたちには教科書が無償貸与されるが(文部科学省, 2013)、ドイツの教科書は日本とは異なり、毎時間必ず使用されるものではなく、教科書に掲載されたすべてのページを授業の中で教えなければならないという特徴をもつものではない。教科書の使用の扱いは各教師や学校に任されている。但し教科書の内容は出版社が自由に決められるものではなく、教科書は各州のガイドラインに沿って各出版社で作成される。その後それらが各州の教育委員会等で検討され、認可された推薦教科書が、各州の文化省や教育・青年・スポーツ省などが発行している印刷物もしくは各州のホームページを通して周知される。その中から各教師は使用する教科書を選択することになる。掲載リスト以外の教科書は教室内で原則として使用することができない。使用できる期間も決められている(例えばバイエルン州総理府(Bayerische Staatskanzlei)が教科書を認可した“Rechtsgrundlagen und weitere Details”(法的根拠と詳細))。教科書の使用期間は教科科目によっても異なり、また州によっても異なるが、各州の許可制であることを鑑みると、ドイツの社会がその当時の子どもに期待する一般的な価値観が教科書に描かれていると考えられる。したがって他の児童書や漫画などの著作物とは異なり、ドイツの大人たちが一般的に望ましいと考える価値観が国語教科書には反映されていると言えるだろう。な

お各作品が転載された初版本の出版年はそれぞれ異なるが、教科書に掲載された時点での年代を本研究では重視している。例えば後述する『エルンスト・テールマンの子ども時代から』の作品は1886年生まれのテールマンの幼少期の頃の話である。しかしこの話を教科書に掲載させたということは、社会主義国にとってテールマンは重要人物であったからかもしれないが、そこに記載されている登場人物の行動は、教科書が作成された時代の大人が良しとしている価値観であると考えた。

本研究では1960～2010年に出版された国語教科書を約10年ごとに収集した。1960年、1970年、1980年に出版されたものは、ゲオルクエカート国際教科書研究所 (Georg-Eckert-Institut für internationale Schulbuchforschung) で収集された³⁾。1990年、2000年、2010年に出版されたものは、各州が推薦する冊子体の教科書リストの中から選定した。現在ではどの州もオンラインで推薦教科書リストが掲載されている⁴⁾。推薦リストをもとに1990年以降の教科書では、ドイツ16州のうち3州以上で掲載されている国語教科書を分析対象とした。

ドイツ (ドイツ連邦共和国: Bundesrepublik Deutschland) では1949年から1990年まで西ドイツ (Westdeutschland) と東ドイツ (ドイツ民主共和国: Deutsche Demokratische Republik; DDR, 通称東ドイツ: Ostdeutschland) に分断されていた。本論文では、その期間の2つの国を西ドイツと東ドイツという名称で記載する。この期間、政治体制や教育システムだけではなく、教科書の認可の仕方も東西ドイツでは異なっていた。したがって本研究でも1960年、1970年、1980年、1990年の教科書については、西ドイツの教科書に加えて東ドイツの教科書も分析対象とし、この期間については東西ドイツに分けて分析を行った。なお東ドイツでは1990年が東ドイツのものとして出版された最後の教科書となっている。2000年の教科書からは旧東ドイツ地域も旧西ドイツ地域とはほぼ同様の教科書がリストに掲載されており、1990年に東ドイツは西ドイツに領土を編入される形で消滅したため、2000年以降の教科書は、ドイツ全体の教科書となっている。しかし教育・社会システムも東ドイツは西ドイツのやり方に合わせたため、2000年と2010年のデータは西ドイツの連続データとして本研究では分析した。

以上の基準で分析対象となる教科書を採択した結果、西ドイツ1960年22冊、1970年9冊、1980年20冊、1990年16冊であった。東ドイツでは1960～1990年までは国定教科書であったため、各学年1冊ずつであった。統一後のドイツにおいては、2000年16冊、2010年44冊が分析対象となった。

2. 分析対象となった作品の選定と分析方法

本研究では、教科書に描かれた作品の中でも父親と母親の家事の記述に焦点をあてた。家事の種類は前述の家事の定義を参考にしうえて、表1の内容に分類された。

対象となった家事行動数は、西ドイツもしくは統一後のドイツの教科書では、1960年は243件、1970年は73件、1980年は205件、1990年は106件、2000年は216件、2010年は334件であった。東ドイツの教科書では、1960年は23件、1970年は23件、1980年は21件、1990年は32件であった。なお家事行動の分析をする際に用いた細則については表2の通りであり、結果と考察に示した『 』内の表記は教科書に掲載された作品名である。

表1 家事の種類と内容

	家事の種類	教科書に描かれた記載例
家族全体への家事	炊事	料理をする。皿洗いをする。料理を並べる。
	洗濯	洗濯をする。洗濯したものを片付ける。
	裁縫	洋服を縫う。子どもの学校の制服に襟をつける。夫のスボンの修繕をする。
	掃除	家の掃除をする。
	大工・庭仕事	電球をつける。テントを立てる。庭で野菜を作る。
	買い物	家族のために生活用品を買いに行く。
	修理	壊れたおもちゃを直す。雨漏りを直す。
楽しい育児	子どもの遊び相手・話し相手	子どもと一緒にサッカーをする。子どもの学校生活の話聞く。子どもとトランプをする。
	子どもを遊びや買い物に連れていく	子どもをピクニックに連れていく。子どもと一緒に散歩に行く。公園に遊びに行く。子どもの洋服を一緒に買いに行く。
	本の読み聞かせ	子どもに本の読み聞かせをする。
	物を与える	子どもに洋服を買ってやる。子どもにプレゼントを買う。
必須の育児	子どもの送迎	学校に送っていく。病院に付き添う。
	子どもの寝かしつけ・起こす	子どもを寝かしつける。子ども部屋の電気を消して寝るよう促す。子どもを起こす。
	子どもの看病	病気になった子どもに対して、熱を下げるように茶を作ってあげる。熱を測る。
	子どものしつけ	部屋を常に片付けておくように言う。友達のことをうらやむことはしないように言う。
	子どもの教育	計算の仕方を教える。町の歴史を教える。
	子どものこまごまとした世話	着替えさせる。子どもの鞆を取ってくる。洗顔をさせる。身体を洗う。
	精神的なケア	慰める。恋愛の相談にのる。褒める。落ち着かせる。
	子どものための他者との交渉	子どもが犬を飼いたがっていたので、他者から譲り受けるために他者と交渉する。
	叱る・注意・指示	妹をいじめている息子を叱る。子どものいたずらを叱る。親の意に沿わない友達とは遊ばないようにと、息子を注意する。家に入るように指示する。
その他		娘を危険から救う。両親が休暇で旅行に行くので子どもの預け先を検討する。

[結果と考察]

1. 父母の家事分担の変化

(1) 西ドイツにおける変化

1960～2010年の教科書に登場した父親と母親の行動の中で、家事行動のみを抽出し、父母間で年代ごとに比較をした。なお、1960～1990年までの東ドイツのデータは本分析からは除外し

表2 分析に関する細則

① 分析対象作品に関する選択基準

- (a) 父親と母親の家事が描かれている作品を対象とする。
- (b) 1つの作品として必ずしも内容が完結していなくても、2行以上の文章になっていれば分析対象とする。
- (c) 練習問題や説明文(例えば動植物の生態などに関する文章)は対象外とする。

② 分析基準に関する細則

- (a) 父親と母親で同時に同じ行動をしている場合には、出現頻度を2倍にして考え、2単位として計算する。さらに父親と母親の行動にそれぞれ1単位ずつ振り分ける。
- (b) 親の性が特定できない場合には、父母間の比較をする際に欠損値扱いとして処理する。
- (c) 親とは必ずしも血縁関係があるとは限らない。

表3 西ドイツの家事行動における親の性別と年代

		親の性別		合計
		父親	母親	
1960年	件数	78	219	297
	%	26.26	73.74	100.00
1970年	件数	31	50	81
	%	38.27	61.73	100.00
1980年	件数	80	144	224
	%	35.71	64.29	100.00
1990年	件数	45	67	112
	%	40.18	59.82	100.00
2000年	件数	91	125	216
	%	42.13	57.87	100.00
2010年	件数	162	207	369
	%	43.90	56.10	100.00
合計	件数	487	812	1,299
	%	37.49	62.51	100.00

た。本分析における家事とは表1に示したすべての家事を指している。

分析の結果、どの年代においても母親の方が父親より家事を行っている割合は高く、どの年代も母親が半数以上を占めている(表3)。その一方で、年代によっても違いがみられ、年代が新しくなるほど、父親の家事分担度が有意に高くなっていった($\chi^2(5, N = 1,299) = 25.10, p < .01$)。特に、1960年と1970年との間($\chi^2(1, N = 378) = 4.47, p < .05$)には有意な違いがみられた。

ドイツの父親が家事をより分担するようになった1960年から1970年の変化は、1960年代後半にアメリカ合衆国で起こったウーマンリブ(Women's liberation movement)の影響があったと推察される。西ドイツは戦後統治の関係からアメリカ文化の影響を色濃く受けたため、このような女性解放運動は西ドイツの家事分担にも影響を与えたと思われる。その後、1979年に国連総会において女子差別撤廃条約が採択されたこともあり、教科書においても徐々に父親の家事参加が増えたのではないかと推測される。

例えば1980年の教科書には父親と息子が「母親学級」に参加して、今度生まれてくる娘の世話をするために、他の母親たちに交じって新生児の扱いを学ぶ様子が描かれていた(“Wann kommt unser Baby auf die Welt?”『私たちの赤ちゃんはいつ生まれますか?』)⁵⁾。しかし「母親学級」に参加するのは主として母親であり、このような父親と息子はいわば「新しい父親・息子像」として、読者である子どもに強調される形で教科書に描かれていると考えられる。

その一方で、1990年前後の教科書においても、母親が料理をして娘が母親を手伝っている間に、父親はテレビでサッカーの試合を見て、冷蔵庫にビールが冷えているかを母親にたずね、息子はテープレコーダーに自分の演奏と歌を吹き込んでいるという家族の姿が描かれていた(“Wenn der Strom ausfällt”『停電したら』)。このことから1980年前後に「新しい父親像」が強調されて描かれ始めたものの、実際の生活では1990年前後になってもまだ伝統的な性別役割分業の考え方は残っていたことが伺われる。

1990年頃になると前年と比較して有意差は見られないものの徐々に父親の家事行動は増加した。そして2000年になると、父親のより積極的な家事参加が描かれるとともに、母親の家事に対する拒否や、従来父親の領域であった「車の修理」などの家事を母親が行うといった記述がみられるようになった。例えば、父親のより積極的な家事参加においては、父親の仕事の時間が午後から始まる場合に、父親が母親の代わりに昼食を作る姿が描かれていた(“Spätschichttage sind Spaghettitage”『遅いシフトの日はスパゲッティの日です』)。また息子が長期休暇中に祖母から料理を学び父親を驚かせる作品(“Jörg lernt kochen”『イエルク(男児)は料理を学んでいます』)が掲載されるようになった。

母親の家事に対する姿勢も2000年以前とは異なり、当たり前のように家事をこなす母親の姿から、家事を拒否する姿が描かれた作品が異なる2社の教科書に取り上げられた。食卓に父親と娘が座るが、朝食が何も出てこない。母親が「今日は私の休日」と宣言して家事を行わないという作品がみられた(“Mama hat heut frei”『今日のママはお休み』)。さらに娘への教育も、母親が娘に対して、「女の子は愚かではなく賢いものだ」と教える作品も登場した(“Die andere”『他の(考え)』)。母親が子どもと一緒に動物園から車で帰る途中に、車が故障してしまい、「パパじゃなければ修理は無理だ」という子どもたちの声に対して、母親が意を決して自分で車を修理し、ご機嫌で帰っていく母子の姿もみられた(“Die Panne”『故障』)。

同時に、親の伝統的な性別役割分業観を問う作品も2000年から掲載されるようになった。父親が息子にサッカーボールやブーメランを買ってやるが、息子はそれらの「男の子らしい」遊びに興味を示さず、モルモットを飼うという「女の子らしい」遊びに興味を示し、最後は父親が譲歩して息子にモルモットを買ってやるというものである(“Ein richtiger Bub”『本物の少年』)。また、男児と女児の双子をそれぞれ「男の子らしく」「女の子らしく」育てようとした両親の意に反して、男の子はおとなしく、女の子は冒険好きに育つという作品もみられた(“Typisch Junge - typisch Mädchen?”『典型的な男の子? 典型的な女の子?』)。

すなわち2000年の段階では新しい親の姿と、今までの伝統的な性別役割分業観を持つ親の姿を同時に描くことで、子どもたちの性別役割分業観を変化させようとする教科書の作り手側の意欲が感じられる。それとともに、⁶⁾「検定」教科書の中でこのような作品を掲載することがで

きたという意味からも、女性の社会進出への考え方が徐々にドイツの社会の中で浸透してきたと言えるだろう。

(2) 東ドイツにおける変化

東ドイツの1960年から1990年の教科書に登場した家事をする父親と母親の出現頻度ではどうか。作品内で家事を行っている行動のみを抽出し、行動数について父母間で年代ごとに比較をした。なお、この期間の西ドイツのデータは本分析からは除外している。

分析の結果は表4の通りである。東ドイツにおける家事分担は父親の方が多い年があるものの、年代間の有意差はみられなかった($\chi^2(3, N=117)=3.34, n.s.$)。したがって東ドイツでは1960年段階からどの年代においても父親の家事参加は、ほぼ母親と同様であったと推察される。

表4 東ドイツの家事行動における親の性別と年代

		親の性別		合計
		父親	母親	
1960年	件数	13	16	29
	%	44.83	55.17	100.00
1970年	件数	13	16	29
	%	44.83	55.17	100.00
1980年	件数	8	15	23
	%	34.78	65.22	100.00
1990年	件数	21	15	36
	%	58.33	41.67	100.00
合計	件数	55	62	117
	%	47.01	52.99	100.00

2. 「家族全体のための家事」行動の変化

(1) 西ドイツにおける変化

家事については前述したように様々な種類があるが、家事の種類によって父親と母親の参加度は異なるのだろうか。ここでは「家族全体のための家事」に注目してみよう。教科書に登場する親の家事について内容分析をした結果、表1に記した通り「炊事」「洗濯」「裁縫」「掃除」「大工・庭仕事」「買い物」「修理」といった家事が抽出された。これらの「家族全体のための家事」は父親と母親のどちらがより多く行っているのだろうか。なお、「家族全体のための家事」については、子どもに対してだけではなく家事をしている当事者も含めてその家事労働から益を受けるものであり、育児はここには含まれない。

分析の結果は表5の通りであった。約6～9歳の子どもを対象にした読み物でもあり、「家族全体のための家事」に関する描写は全体的に少ない。しかし、特に2000年と2010年との間に有意差がみられ($\chi^2(1, N=66)=6.49, p<.01$)、2010年になると父親も母親と同程度の割合で行っていることが明らかになった。「家族全体のための家事」の中でも特に「炊事」に関しては、

表5 西ドイツの「家族全体のためにする家事」における親の性別と年代

		親の性別		合計
		父親	母親	
1960年	件数	7	48	55
	%	12.73	87.27	100.00
1970年	件数	0	9	9
	%	0.00	100.00	100.00
1980年	件数	8	38	46
	%	17.39	82.61	100.00
1990年	件数	6	19	25
	%	24.00	76.00	100.00
2000年	件数	8	29	37
	%	21.62	78.38	100.00
2010年	件数	15	14	29
	%	51.72	48.28	100.00
合計	件数	44	157	201
	%	21.89	78.11	100.00

父親12件、母親10件の記述がみられた。

前述したように、2000年から少しずつ父親が家事をする姿がみられていたが、2010年になると「炊事」は父親の家事の中でより一般的になっていた。料理を上手にして子どもたちから「お父さんの料理はおいしい」と言われる作品も登場する（“Papa kocht”『パパが料理をする』）。日本の教科書の作品にみられるように、父親が病気の母親に代わって娘の遠足の弁当のために不格好なおにぎりを作り、娘を恥ずかしがらせる姿とは異なり（『えんそく』）、ドイツの教科書には料理を上手にこなす父親の姿が描かれていた。2000年出版の西ドイツの教科書に登場する父親は、伝統的な性別役割分業行動の対比として描かれていたのに対して、2010年になると日常の一コマとして父親が炊事をするようになってきたと言えるだろう。

また父親だけではなく、母親の家事に対する考え方も変化したと思われる。ドイツではかつて「半日制」の学校が多かったが⁷⁾、2007年段階で普通教育を提供するすべての学校の約6分の1は「全日制」に移行した（文部科学省生涯学習政策局調査企画課、2010）。現在でも「全日制」への完全な移行はなされていないが、かつては特に旧西ドイツ地域のすべての基礎学校の授業は午前中で終わり子どもが帰宅するため、母親が家で子どものために昼食の準備をすることが多かった。また働いている母親も子どもの帰宅に合わせて午前中で仕事を終えるなどが一般的であった。実際の国際比較調査においても、2002年の旧西ドイツ地域に居住する人に「小学生の子どもをもつ母親の望ましい就業形態」を聞いたところ、男性回答者で「フルタイム」と答えたのが10.33%、「パートタイム」72.59%、女性回答者は「フルタイム」7.20%、「パートタイム」80.00%であった。一方、2012年の同様の調査では男性回答者は「フルタイム」18.40%、

「パートタイム」72.86%, 女性回答者は「フルタイム」19.00%, 「パートタイム」75.84%であった(GESIS - Leibniz-Institute for the Social Sciences, 2002 ; 2012)。2012年段階でも「全日制」に移行していない学校も多いため、母親の望ましい就業形態としてパートタイムをあげる者も多く、子どもが家に帰る頃には母親も帰っていることが男女とも望ましいと答えてはいるが、フルタイムの割合も徐々に高くなってきている。このような実際の学校システムの変化に加えて、人々の価値観の変化が2000年と2010年の教科書の中に描かれた「家族全体のための家事」の父親の家事参加度にも反映されたと推察される。

(2) 東ドイツにおける変化

1960～1990年の東ドイツでは、「家族全体のための家事」行動はどのように変化したのだろうか。分析の結果は表6の通りである。東ドイツの教科書には、家事自体があまり描写されておらず総数も少ないが、「家族全体のための家事」はどの年代でも母親が担っていることが明らかになった。特にその中でも「炊事」は母親が担っていた。

例えば1990年の東ドイツの教科書には、父親が薪を割って子どもたちがそれを手伝う一方で、母親が台所で家族全員分のたくさんのケーキを焼く姿が描かれていた(“Gemeinsame Arbeit”『共同作業』)。また毎朝子どもが学校に持って行く弁当をつくってやるのも母親だったことが伺われる(“Aus der Kindheit Ernst Thälmanns”『エルンスト・テールマンの子ども時代から』)。総数が少ないことから確かなことは言えないが、東ドイツでは育児も含めた家事全体に対しては父親が積極的に参加していたが、「家族全体のための家事」については1990年段階であっても父親と比べて母親の負担の程度が高かったのではないかと推察される。すなわち社会主義国であっても父親と母親が完全に平等な形で家事を分担していたのではなく、西ドイツほどではないが、特に「家族全体のための家事」分担については、母親がより多く担っていたと本分析から考えられる。

表6 東ドイツの「家族全体のためにする家事」における親の性別と年代

		親の性別		合計
		父親	母親	
1960年	件数	0	6	6
	%	0.00	100.00	100.00
1970年	件数	0	6	6
	%	0.00	100.00	100.00
1980年	件数	0	4	4
	%	0.00	100.00	100.00
1990年	件数	1	4	5
	%	20.00	80.00	100.00
合計	件数	1	20	21
	%	4.76	95.24	100.00

これらの結果を裏付けるように、1994年の実際の旧東ドイツ地域の統計調査においても、洗濯などのこまごまとした家事については89.93%の男女が「妻がいつもする」「妻がたいていする」と答えている(GESIS - Leibniz-Institute for the Social Sciences, 1994)。「炊事」については質問項目自体がなかったため、確かなことは言えないが、教科書の中だけではなく、実際にもこまごまとした「家族全体のための家事」を女性が担っていた可能性が高い。

3. 育児行動の変化

(1) 西ドイツにおける変化

家事の中でも親の育児行動に焦点をあててみよう。家族全員のための家事とは異なり、ここでは子どものみに向けた家事、すなわち親の育児のみを対象とした。表1の「楽しい育児」と「必須の育児」の合計が、本分析の対象となっている。各年代の育児行動をする親の出現頻度は表7の通りである。どの年代でも母親の方がより多くの育児を行っていた。しかし父親と母親の育児に携わる程度は年代間で有意な違いがあり($\chi^2(5, N=976) = 13.74, p < .05$)、特に1960年と1970年との間に有意差がみられた($\chi^2(1, N=252) = 4.19, p < .05$)。

表7 西ドイツの育児行動における親の性別と年代

		親の性別		合計
		父親	母親	
1960年	件数	56	132	188
	%	29.79	70.21	100.00
1970年	件数	28	36	64
	%	43.75	56.25	100.00
1980年	件数	63	96	159
	%	39.62	60.38	100.00
1990年	件数	35	46	81
	%	43.21	56.79	100.00
2000年	件数	83	96	179
	%	46.37	53.63	100.00
2010年	件数	135	170	305
	%	44.26	55.74	100.00
合計	件数	400	576	976
	%	40.98	59.02	100.00

これらの結果から、1960年代後半から1970年代にかけて父親も育児に対してより積極的に関わるようになってきており、その後も父親の育児参加は徐々に増えてきたと考えられる。但し、父親の考え方の変化は母親のそれに比べて変化の程度が少ないことが、実際の調査からも推察される。1988年の西ドイツで実施された国際比較調査では、「子どもが小学校に入るまでは母親は家にいた方がよい」と考える男性回答者は78.26%、女性回答者は73.85%とほぼ同程度だったのに対して、1994年の調査では男性回答者71.42%、女性回答者は65.31%、2002年の調査

では男性回答者は60.29%, 女性回答者は43.80%となっている(GESIS - Leibniz-Institute for the Social Sciences, 1988; 1994; 2002)。父親においても伝統的な性別役割分業観は徐々に変化してきているものの、母親の変化の方が大きい。このように男女の価値観の変化の違いが反映されたため、1970～1980年代にかけて新しい家族像が提示されたのちも、父親の育児参加はなかなか進まなかったのではないかと推測される。但し2000年段階では母親とほぼ同程度の育児参加をしており、父親の育児行動を次世代の子どもたちに積極的に伝えようという試みが伺われる。

(2) 東ドイツにおける変化

東ドイツにおける親の育児の出現頻度は表8の通りである。東ドイツは国定教科書であり各学年1冊ずつしかないことに加えて、国家的なイベントや偉人の記述が多く、育児そのものの記述は多くない。そのため、親の育児行動自体の総数は少ないが、どの年代も父母共に同程度の育児数であり、年代間の有意差もみられなかった($\chi^2(3, N=78) = 1.71, n.s.$)。

表8 東ドイツの育児行動における親の性別と年代

		親の性別		合計
		父親	母親	
1960年	件数	10	7	17
	%	58.82	41.18	100.00
1970年	件数	10	7	17
	%	58.82	41.18	100.00
1980年	件数	7	10	17
	%	41.18	58.82	100.00
1990年	件数	16	11	27
	%	59.26	40.74	100.00
合計	件数	43	35	78
	%	55.13	44.87	100.00

このような傾向は実際の人々の価値観からも伺われる。ドイツ統一後の1994年段階での国際比較調査では、旧東ドイツ地域に居住していた人の中で「子どもが小学校に入るまでは母親は家にいた方がよい」と考える男性回答者は23.3%, 女性回答者は18.3%となっている。一方、旧西ドイツ地域に居住していた人では、男性回答者は71.42%, 女性回答者は65.31%となっており(GESIS - Leibniz-Institute for the Social Sciences, 1994)、この段階でも就業に対する東西ドイツの考え方の違いが残っていた。すなわち東ドイツでは保育施設が整備されていたり、女性が働くことに対して西ドイツ地域よりも一般的であったりしたため、育児に関しても父母ともに協力して行う姿が教科書にも一貫して描かれていたと考えられる。

(3) 育児の種類による分担の変化

親が家庭の中で行う育児には、「寝かしつけ」、「送り迎え」、「看病」、「一緒に遊ぶ」など様々な種類がある。育児の種類によって父母の育児行動は異なるのだろうか。またそれは年代

によって変化してきたのだろうか。教科書に描かれた育児行動を、必ずしもしなくてもよいが子どもの楽しみのために行ったり、親も一緒に楽しんだりする「楽しい育児」と、子どもの生命を維持したり子どもが社会の中で生活するために親が行う必要のある「必須の育児」の2種類に分けて(表1)、育児を行う親の出現頻度の変化を分析した。

分析の結果は表9の通りである。1960～2010年までの西ドイツおよび統一後のドイツの親の出現数をすべて合計して「楽しい育児」と「必須の育児」について父親と母親との間で比較した。その結果、父親母親それぞれが行っている育児全体を100とした場合、母親は「必須の育児」を79.78%行っていた。一方、父親は57.18%にとどまっており、育児には参加するが母親と比べると父親は「楽しい育児」をより行う傾向が有意にみられた。但し、年代によっても異なり、1970年と1990年では有意差がみられず、父母の2種類の育児分担は同程度だったと考えられる。これらの結果からどの年代も母親の方がいずれも「必須の育児」を行う傾向があったが、西ドイツでは育児分担に関して行きつ戻りつしながら父親と母親との間で分担のせめぎ合いが行われていた可能性はある。

表9 西ドイツの育児の種類における親の性別と年代

		親の性別				合計		χ^2
		父親		母親		父親	母親	
		楽しい育児	必須の育児	楽しい育児	必須の育児			
1960年	件数	25	29	29	98	54	127	$\chi^2 = 9.96^{**}$ df = 2, N = 181
	%	46.30	53.70	22.83	77.17	100.00	100.00	
1970年	件数	9	17	8	26	26	34	$\chi^2 = 0.89$ df = 2, N = 60
	%	34.62	65.38	23.53	76.47	100.00	100.00	
1980年	件数	22	41	19	77	63	96	$\chi^2 = 4.55^*$ df = 2, N = 159
	%	34.92	65.08	19.79	80.21	100.00	100.00	
1990年	件数	12	22	10	30	34	40	$\chi^2 = 0.93$ df = 2, N = 74
	%	35.29	64.71	25.00	75.00	100.00	100.00	
2000年	件数	43	38	19	74	81	93	$\chi^2 = 20.13^{**}$ df = 2, N = 174
	%	53.09	46.91	20.43	79.57	100.00	100.00	
2010年	件数	56	76	27	137	132	164	$\chi^2 = 24.42^{**}$ df = 2, N = 296
	%	42.42	57.58	16.46	83.54	100.00	100.00	
合計	件数	167	223	112	442	390	554	$\chi^2 = 56.17^{**}$ df = 2, N = 944
	%	42.82	57.18	20.22	79.78	100.00	100.00	

欠損値 32件

** p < .01 * p < .05

東ドイツの親についてはどうだろうか。前述したように東ドイツでは親の育児行動自体の数値がどの年代でも少ないが、1960～1990年を合計しても、各年代でみてもいずれも父母間に有意差はみられなかった(表10)。父母ともに「必須の育児」を「楽しい育児」よりも多く行っていたことは西ドイツと同様であるが、父母間での分担割合は同程度となっていた。

東ドイツでは社会主義体制のために、母親も社会で働くことが求められ、家庭内でも育児を

表 10 東ドイツの育児の種類における親の性別と年代

		親の性別				合計		χ^2 値 ⁸⁾
		父親		母親				
		楽しい育児	必須の育児	楽しい育児	必須の育児	父親	母親	
1960年	件数	4	6	2	3	10	5	
	%	40.00	60.00	40.00	60.00	100.00	100.00	
1970年	件数	4	6	2	3	10	5	
	%	40.00	60.00	40.00	60.00	100.00	100.00	
1980年	件数	1	6	0	10	7	10	
	%	14.29	85.71	0.00	100.00	100.00	100.00	
1990年	件数	5	11	3	6	16	9	$\chi^2 = 0.93$ df = 2, N = 74
	%	31.25	68.75	33.33	66.67	100.00	100.00	
合計	件数	14	29	7	22	43	29	$\chi^2 = 0.59$ df=2, N=72
	%	32.56	67.44	24.14	75.86	100.00	100.00	

欠損値 6件

協力して行うことが期待されていたと考えられるが、育児の内容についても単に「楽しい育児」のみを父親が行っていたのではなく、日常的に「必須の育児」にも父親が積極的に関わっていたと推察される。例えば1960年出版の東ドイツの教科書には、子どもの就寝時の読みかせを父親が行っていた(“Ein Besuch bei dem Riesen”『巨人への訪問』)だけではなく、朝娘を起こして、洗顔や上半身を濡れたタオルで拭くのを手伝ったりする父親の姿が描かれていた(“Guten Morgen, Papa”『おはよう、パパ』)。この時代の西ドイツの教科書には、朝の洗顔を手伝う父親の姿は描かれていなかったが、東ドイツではこまごと子どもの世話を父親が行っていたことが伺われる。

1980年になると、朝子どもたちを起こす母親の姿はみられなかったが、父親の姿はみられたり(“Heraus aus dem Bett!”『ベッドから出なさい!』)、妹に本読みの練習を邪魔されてどこまで勉強したのかわからなくなった息子に対して、「最初から読むしかないよ。」と助言をする父親の姿(“Jaschas Unglück”『ヤーシャの不幸』)がみられた。このように子どもたちの生活や勉強に細やかに寄り添う父親の姿が描かれていた。

1990年になると、浴槽の中で石鹸を泡だらけにして遊ぶ子どもたちに注意する父親の姿や(“In der Badewanne”『浴槽のなかで』)、父親が盲目の息子を連れて二人だけで動物園に行き、動物の様子について事細かに説明をする姿(“Georg im Tiergarten”『動物園のゲオルク』)が描かれていた。このように東ドイツでは1960年代から父親が「楽しい育児」だけではなく、「必須の育児」にまで積極的に関わっていた様子が浮かび上がってくる。

4. 父母の家事分担からみえる家族の崩壊と再構築

東ドイツでは、家族全体のためにする家事の中でも特に「炊事」が母親の役割になっており、社会主義体制の中でも母親が家の中の細かな仕事を父親より多く担っていたことが伺われた。

しかし育児については父母で1960年代からすでに同じような育児を協力して行っていたと推測される。東ドイツの教科書が国定教科書であり、政府が推進する男女平等がより強調して記載されたとも考えられるが、国際比較調査においても、西ドイツより男女平等の回答傾向が高かったことを考えると、東ドイツの国語教科書に反映された育児の平等化は、実際の国民の生活感覚と大きく乖離してはいなかったと思われる。

一方、西ドイツ及び統一後のドイツでは、家族全体のための家事については、「新しい父親像」を掲載しながら徐々に変化してきてはいたが、東ドイツほどではなく、2010年になってようやく日常的な家事行動を父親がするようになってきたと言えるだろう。但しこれは1つの家族の中で父母が協力して家事を分担するようになったと考えることもできるが、同時に離婚が進み、父子家庭で父親が家事をやらざるをえなくなったこともあるのではないか。すなわち単に女性の社会進出のみが価値観を変化させたのではなく、家族の崩壊も父親の家事行動に影響を与えたと考えられる。例えば2002年に実施された国際比較調査においても「食事の支度」に関して、旧西ドイツ地域に居住していた男性回答者の6.5%が「たいてい男性が行っている」もしくは「いつも男性が行っている」と回答していたが、2012年では12%となっている(GESIS - Leibniz-Institute for the Social Sciences, 2002 ; 2012)。10年前の約2倍になっているところを見ると、父親が積極的に家事に参加するようになったこともあるが、同時に父子家庭が増えたこととも関係している可能性がある。

このような傾向は教科書の作品にも反映されていた。例えば、父子家庭で父親が在宅勤務をしながら娘の世話をしている作品(“Alles Familie”『すべての家族』)は、2010年版の教科書に2つの出版社から掲載されていた。また母親が仕事で長期出張をしている間、父親と娘だけで暮らしているのだが、その状態を娘が「私たちは本当の家族ではない」と言うのに対して、単身家庭や祖父母のみと暮らす娘の友達の家族を例にあげながら「(母親がいない状態でも)リサ(娘)とパパは本当の家族だよ。」と言って子どもを安心させる父親の姿が描かれていた(“Eine richtige Familie”『本当の家族』)。離婚や再婚がより多くなるドイツにおいて、父親が再婚相手の息子とサッカーをする作品(“Manches ist bei Paule anders”『パウレの場合は違う』)も掲載されていた。すなわち父親の育児行動が増加した一つの要因として、家族形態の崩壊と再構築によって、父親が育児に関わらざるをえなくなったこともあげられるだろう。

〔結 論〕

本研究の結果から以下の3点が指摘できる。第一に、社会体制と家事行動との関係についてである。東ドイツでは女性のフルタイム就業を社会主義体制の中で政策的に進めたため、家事行動の平等化意識も早くから定着したと思われる。東ドイツでは、1950年には51.9%と西ドイツと変わらない就業率だったが、1950年代と1960年代に女性を対象とした集中的な労働市場政策キャンペーンにより、雇用された女性の数は急速に増加した。1950~1970年の間に、東ドイツの女性の雇用率は29%上昇し、1989年までにさらに8%上がり、89.0%というほとんどの女性が就業していたことを示す数字となった。一方、西ドイツでは、女性の就業率は全期間を通じてわずかに増加しただけであり、1989年には55.5%であった。これは東ドイツの女性

89.0%と比べると大きく下回る数値である。さらに、西ドイツで雇用された女性の割合の増加は、主にパートタイム雇用の増加の結果であった(Deutsches Institut für Wirtschaftsforschung, 1987)。このように政策によるフルタイムの就業率の高さが家事行動の平等化をもたらしたと言えるだろう。そして統一後のドイツにおいても旧西ドイツ地域と旧東ドイツ地域に居住していた人では価値観に相違がみられ、一定の時期に形成された価値観は個人に内在化されて、その後もある程度維持されていくのではないかと推測される。

第二に、女性の社会進出に対する考え方の変化と家事行動との関係についてである。旧東ドイツ地域の家事行動の平等化には及ばないものの、旧西ドイツ地域そして統一後のドイツにおいては女性の社会進出に対する考え方の変化が、父親の家事参加度を徐々に高くし、家事行動の平等化が進んできたことが、本分析や国際比較調査の結果から明らかになった。女性の就業率についても、西ドイツは1950年には43.7%だったが、1970年には46.2%となり、1990年には55.5%となった(Deutsches Institut für Wirtschaftsforschung, 1987)。すなわち、社会主義体制としての政府一丸となった就労政策よりもその効果は小さいが、実際の就業率と就業に関する考え方の変化が、家庭内の父親の家事行動を少しずつ引き上げる要因の一つになったと言えよう。但しその一方で、女性の就業率は上がったが、パートタイムで働いている母親も多く、社会進出を推し進めると同時に、家事行動の平等化も進めていかないと、結局はパートタイムでしか働けず、特にフルタイムで働く女性の家事と仕事との両立は難しくなる。

以上のことから第三に、フルタイム就業を推進するだけではなく、家庭内の家事労働の内容についても意識を変えていく必要性が指摘できる。女性の社会進出や政治体制によって女性の雇用が促進され、それによって父親の家事参加が進められてきたことは前述の通りである。しかし家事が私的で個人的な家庭内の労働であるがゆえに、法整備によって規定することができない領域であることから、「必須の育児」をどのように父親に促進させるかを考えなければならない。本分析でも明らかになったように、特に旧西ドイツ地域においては、母親と比べると依然として父親は「楽しい育児」を行う傾向がみられた。子どもと遊んだり一緒に買い物に行ったりといった「楽しい育児」には父親が積極的に参加する傾向がみられてはきたが、子どもの看病をしたり着替えさせたりといった「必須の育児」については、育児行動の平等意識をさらに進める必要があるだろう。

最後に、本研究におけるドイツの教科書分析で得られた知見が、今後の日本の家事行動の平等化に対してどのように適用できるかを考えたい。以下の2点が指摘できる。第一に、東西ドイツの社会体制の違い、女性の社会進出や母親のフルタイムに対する就労観、そして東西の教科書に描かれた父親と母親の家事行動の分析から、女性の就業や保育に関する法整備をさらに進める大切さが指摘できる。政府自身が女性のフルタイム就業を進める政策を積極的に実施したり、保育所の整備をしたりすることを日本でもさらに推進することによって、次世代に伝える性別役割分業観が変化する可能性がある。

第二に、単に女性の社会進出に関する法整備や環境を整えるだけではなく、子どもの時からの男女平等意識が重要となる。例えばドイツの教科書のように父親が家事を積極的に行っている姿を描いた作品を、毎日子どもたちが接する教科である国語教科書の中でも取り上げる必要

があるだろう。父親が必要に迫られてたまに家事をしたり「楽しい育児」をするだけではなく、日常的に父親が家族全体のために家事をしたり、「必須の育児」をする場面を意識的に教科書の中に盛り込むことが、次世代の家事における役割分業観の平等化につながっていくと思われる。日本でも離婚が増加し、母子家庭だけではなく父子家庭も増えている。その際に父親が「必須の育児」に関わりやすくなるよう、社会全体での家事の平等意識を持つ取り組みは、幼少期から学校教育の中でますます求められてくるであろう。

今後の研究課題として、ジェンダーに対する考え方がさらに変化しているであろう2020年の教科書をも分析対象としながら、さらに進む女性の社会進出や家族構造の変化をも考慮に入れて、教科書に描かれた家事における性別役割分業観の変遷について分析する予定である。

謝辞

本論文は2019年度同志社女子大学在外研究助成を受けて刊行されました。またこの期間研究員として受け入れていただいたゲオルクエカート国際教科書研究所 (Georg-Eckert-Institut für internationale Schulbuchforschung) には謝意を表します。

注

- GESIS - Leibniz-Institute for the Social Sciences が行っている International Social Survey Programme の中の Family and Changing Gender Roles の調査データをもとに塘が SPSS (Ver.26) にて再分析を行った。この国際調査は1988年、1994年、2002年、2012年に継続的に実施された質問紙調査であり、4回とも同じ内容で調査されている質問項目が含まれている。2012年の調査では45か国の約6万人が調査に参加しており、旧西ドイツ地域居住者約1,000人、旧東ドイツ地域居住者約500人、日本約950人の対象者が参加している。
<https://www.gesis.org/en/issp/modules/issp-modules-by-topic/family-and-changing-gender-roles> (2020年8月31日)。
- 正式には「基礎学校」と言われ、ドイツでは「基礎学校」1～4年生までは初等教育段階に位置付けられている (文部科学省生涯学習政策局調査企画課、2010)。
- 教室で使われる教科書は、日本とは異なり1960年に発行されたものが1960年のみに使われたとは限らず、現在の推薦教科書リストにも3～4年前に発行されたものが掲載されている。したがって、1960～1980年の教科書においても対象とした年及びその年の1～4年前の発行年のものから選択した。
- 例えばヘッセン州の場合には以下で公表されている。
https://kultusministerium.hessen.de/sites/default/files/media/hkm/schulbuecherkatalog_fuer_allgemein_bildende_schulen_und_schulen_fuer_erwachsene_stand_01.05.2020.pdf (2020年10月1日)。
- ページ数の関係から作品のタイトルのみ記載した。
- 教科書は日本と同様に各州の教育委員会の許可制ではあるものの、システマ的にも異なる点があるため「」付の「検定」と表記した。
- ベルリンでは2006年8月ですでにすべての基礎学校と総合制学校が全日制となっている。ベルリンでは2003年以前に旧東ベルリン地区において全日制学校がすでに数多く存在していたため、いち早く全校達成にこぎつけた。但し州によっても異なり、現在でも「半日制」である州も多い。
- 1960年、1970年、1980年においては χ^2 検定に必要な数値に達していないため χ^2 値は算出してない。

参考文献

- 天野寛子 (1978) 「育児および家事労働」宮崎礼子・伊藤セツ (編), 『家庭管理論』東京: 有斐閣
- Bayerische Staatskanzlei. (2020). Rechtsgrundlagen und weitere Details (法的根拠と詳細).
<https://www.km.bayern.de/lehrer/unterricht-und-schulleben/lernmittel.html> (2020年10月1日).
- Deutsches Institut für Wirtschaftsforschung. (1987). Immer mehr Frauen im Beruf. Zur längerfristigen

Entwicklung des Erwerbsverhaltens von Frauen. *Wochenbericht*, 54(29), 393-402.

不破麻紀子・筒井淳也(2010). 「家事分担に対する不公平感の国際比較分析」『家族社会学研究』22(1), 52-63.

伊藤セツ(1981). 「序論」大森和子・好本照子・阿部和子・伊藤セツ・天野寛子(編)『家事労働』東京：光生館

岩崎香織(2016). 「若年層の家事に関する質的研究：家庭科男女必修世代のお手伝い経験と高校卒業後の家事」

『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』59, 82.

Koch, P., & Knöbel, H.G. (1988). *Familienpolitik der DDR im Spannungsfeld zwischen Familie und Berufstätigkeit von Frauen*. Pfaffenweiler: Centaurus-Verlagsgesellschaft.

国立教育研究所(2005). 『家庭科のカリキュラムの改善に関する研究—諸外国の動向—(「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書(22))』東京：国立教育政策研究所.

国立女性教育会館(編)(2006). 『平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査報告書』.

国立社会保障・人口問題研究所(編)(2020). 『2018年社会保障・人口問題基本調査第6回全国家庭動向調査報告書』厚生労働統計協会.

文部科学省(2013). 『諸外国の教育行財政：7か国と日本の比較』東京：ジアース教育新社.

文部科学省(2018). 『小学校学習指導要領(平成29年告示)』東京：東洋館出版.

文部科学省(2018). 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編』東京：東洋館出版.

文部科学省生涯学習政策局調査企画課(2010). 『諸外国の教育改革の動向：6か国における21世紀の新たな潮流を読む』東京：ぎょうせい.

Münch, U. (1990). *Familienpolitik in der Bundesrepublik Deutschland -Maßnahmen, Defizite, Organisation familienpolitischer Staatstätigkeit*. Freiburg im Breisgau: Lambertus.

表 真美(2005). 「子どもの家事労働とジェンダー形成・人間形成」『京都女子大学発達教育学部紀要』1, 73-79.

総務庁青少年対策本部(編)(1995). 『子供と家族に関する国際比較調査報告書』東京：総務庁青少年対策本部.

塘 利枝子(2003). 「教科書の中のジェンダー—次世代に伝えるジェンダー像—」柏木恵子・高橋恵子(編)『ジェンダーと心理学』(pp.94-99)東京：有斐閣.

塘 利枝子(2008). 「社会・経済変動と家族—教科書を通してみた家族の変化—」柏木恵子(監修)・塘 利枝子・福島朋子・永久ひさ子・大野祥子(編)『発達家族心理学を拓く—家族と社会と個人をつなぐ視座—(pp.97-111)』京都：ナカニシヤ出版.

塘 利枝子(編著)(2005). 『アジアの教科書に見る子ども』京都：ナカニシヤ出版.

Tomo, R., & TUNG, C-H. (1999). Content Analysis of Japanese, Taiwanese and German Textbooks: Sex-role of Child-rearing Behavior. *Social and Psychological Change of Japan and Germany: The last decade of the 20th century*. German-Japanese Society for Social Sciences (pp.361-370). Tokyo: Waseda University.

Keywords：教科書，家事，育児，性役割，社会体制